



漢詩を味わう

第92回

焚書坑ふんしよこう

章碣しょうけつ（晚唐）

竹帛烟消帝業虚

竹帛ちくはく 煙消えて帝業虚し

關河空鎖祖龍居

關河かんが 空しく鎖ざす 祖龍そりゅうの居

坑灰未冷山東亂

坑灰こうはい 未だ冷えざるに山東みだ亂る

劉項元來不讀書

劉項りゅうきやう 元來 書を読まず

書物を焼いた煙が消えるとともに、天下統一の大事業もはかなくくずれ、始皇帝のいた咸陽もまた、今はむなしく函谷関と黄河にとざされている。坑の中の灰も冷え切らないうちに、もう山東は乱れた。反乱の中心、劉邦も項羽も、もともと学問などはしていなかったのだ。

《坑》 あな。坑のなかで書物を焼いたとされる。

《竹帛》 書物のこと。紙は後漢に発明されるまでは字は竹簡（竹のふだ）か帛（きぬ）に書いた。

《帝業》 帝王としての事業。

《關河》 函谷関と黄河。

《祖龍》 祖は始と同じで龍は皇帝の象徴で、始皇帝のことをいう。

《山東》 現在の河北・河南・山東省を含めた地域をさす。

《劉項》 劉邦と項羽。

秦の始皇帝時代の宰相の李斯は、国民に法を厳格に遵守させることによつて国を治める、法家思想の実践者でした。実用的な学問以外はすべて批判精神を強め、反骨心を育てるばかりだとして、儒教をはじめとする諸子百家の経典、特に「詩経」と「書経」を焼くことを始皇帝に進言しました。始皇帝はこの建議を受け入れて焚書の命令を下しました。さらにその後も咸陽にいた学者四百六十人余りを坑埋めにしました。これが坑儒で、二つを併せて「焚書坑儒」と言われます。秦は厳しい言論弾圧と思想統制によって王朝を保とうとしました。しかし始皇帝の時代はわずか十五年で幕を閉じます。書物を焼いた灰が冷え切らないうちに始皇帝が力で従えた山東の諸国からはもう反乱の火の手が上がりました。学問を弾圧して焚書坑儒を行ったのに結局秦を滅ぼしたのは、皮肉にも学問に縁のない劉邦と項羽の二人だったということです。焚書も坑儒もいったい何のためにあったのか。つねに不必要な犠牲を生み出さずにはおかない「歴史」というものに対する作者章碣の疑問が、この詩の支柱となっています。

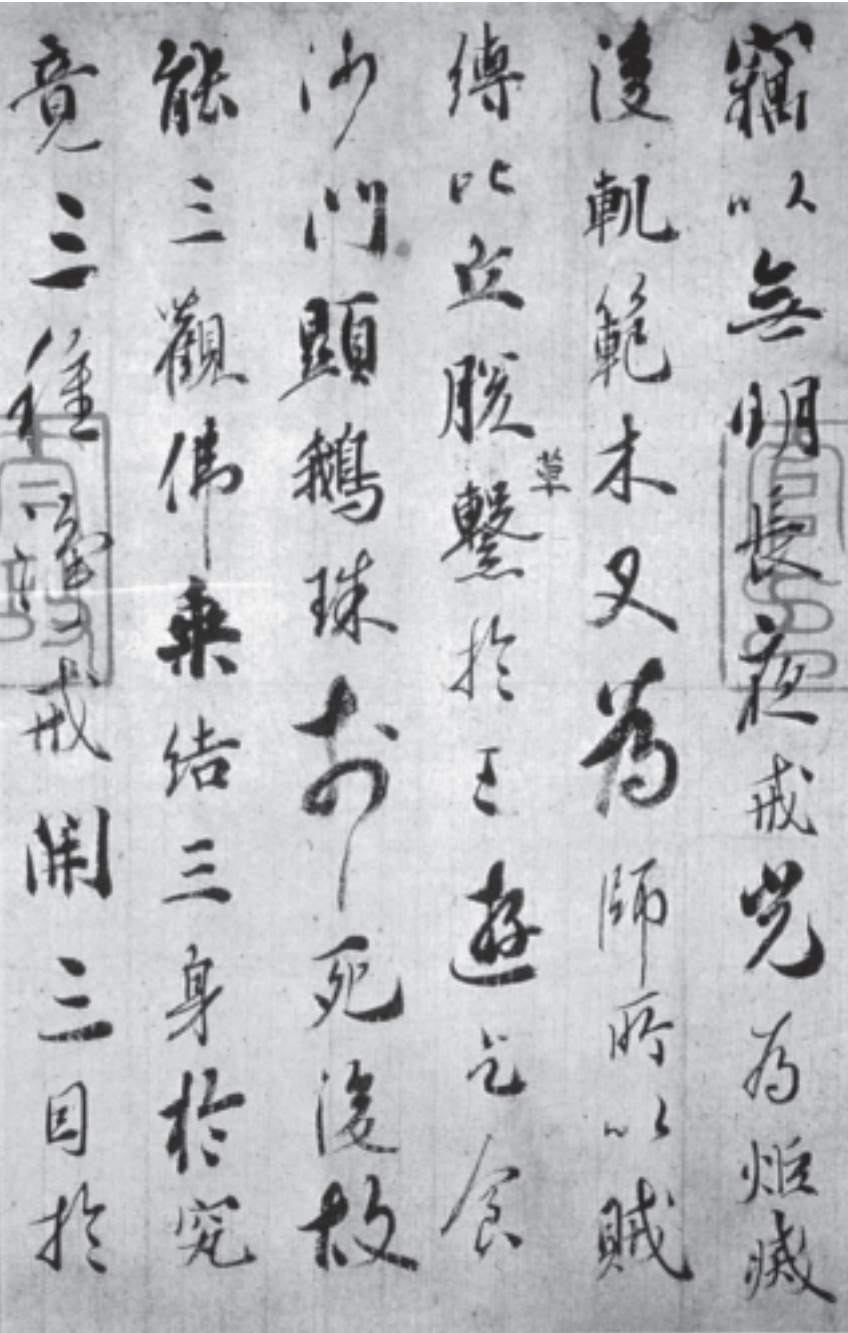
参考文献・唐詩鑑賞辞典（東京堂出版）・漢詩の辞典（大修館書店）

日本の名筆(7)

三筆の一人・第五十二代天皇の高雅な書

嵯峨天皇「光定戒牒」

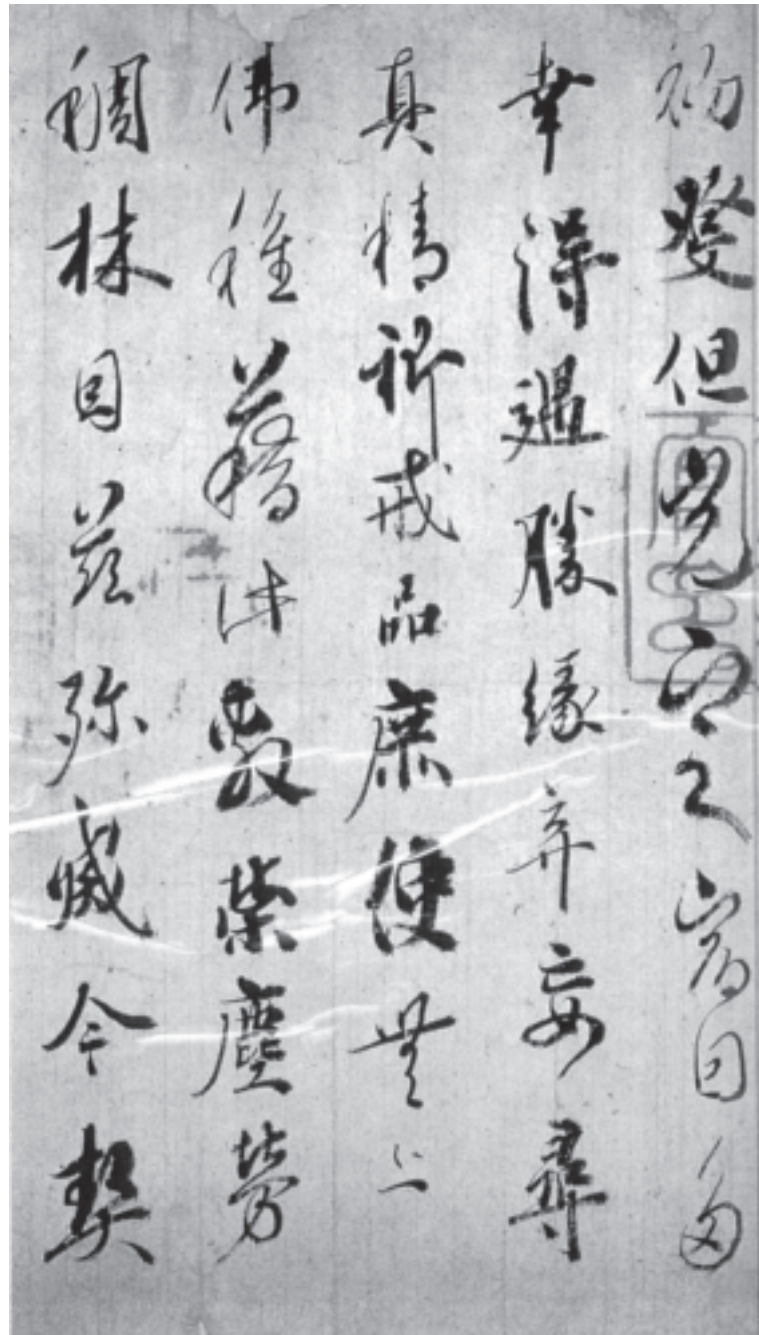
こうじょうかいじょう



■嵯峨天皇

嵯峨天皇（七八六～八四二）は桓武天皇第二皇子。西暦八〇六年に桓武天皇が崩御し、兄の平城天皇が即位しますが、病弱なために譲位され、西暦八〇九年、二十四歳で天皇に即位します。若い頃から「人君之量」があるとされて、蔵人所・檢非違使などを設け平安時代の律令格式を整えましました。また文教面では学問の隆盛とともに私学の興隆を奨励し、空海の「綜芸種智院」、和気氏の「弘文院」、藤原氏の「勸学院」などの創設をみましました。

嵯峨天皇は幼少より聡明で読書を好んで学問を修め、成人して経書及び史書を博覧し、詩文や書にも長じていました。特に漢詩を好まれ、「凌雲集」「文華秀麗集」の漢詩文を勅撰させ、これらのなかに多くの詩文を残しています。また空海とは親密な交流があり、仏教や書法においても多大



竊かに以るに、無明の長夜には寂光をば炬と
為し、滅後の軌範には木叉をば師と為す。賊
に縛せられし比丘が、草の繫を王融遊に脱
し、食を乞うの沙門が鷲珠を死後に頭す所以
なり。故に能く三觀の仏乗は、三身を究竟に
結び、三種の淨或は三因を初発に開く。但だ
光定宿因幸多く、勝縁に遇うを得、妄を弃て
真を尋ね、戒品を精祈す。庶は無上の仏種を
して使わしめんことを。此れに籍りて敷榮
し、塵勞の稠林をして、茲に因つて殄滅せ。
今契り……

な影響を受けます。

平安時代は奈良天平時代に引き続き唐の文化が最も尊重されました。ことに嵯峨天皇は唐風を特別愛好され、儀式や男女の衣服にいたるまで唐に倣ったといえます。嵯峨天皇自らが空海・橘逸勢とともに毫を揮った大内裏の門額も唐風の名称でした。書風は当時の最も愛好された王羲之を土台として、最澄が将来し、空海もまたその真跡を献上したとされる欧陽詢を非常に好まれたといわれます。空海及び橘逸勢とともに「三筆」に数えられ、そのうち嵯峨天皇と空海は「二聖」ともいわれ、その書が特別に尊重されています。

■光定戒牒

最澄が晩年に大乘仏教独自の大乘戒壇の建立に尽力したことは、本稿の「最澄」の折に触れました。弟子の光定は右大臣藤原冬嗣に懇願し嵯峨天皇に奏請して、最澄の没後七日目、ついに大乘戒壇建立の勅許を賜りました。最澄の弟子たちは早速比叡山に戒壇を建立し、受戒が行われます。このとき光定も受戒しましたが、戒壇建立に最も努力した光定に、嵯峨天皇が特別に自ら書いて賜ったものが「光定戒牒」です。戒牒とは受戒したことを公認する文書で、僧侶が仏教上の戒めと守るべき規則である戒律を受けることを受戒といえます。

料紙は縦に漉目のある白麻紙がもちいられ、文面に太政官印が十一顆押されています。この太政官印の文字が疑わしいとして宸翰(天皇の筆跡)とすることに否定的な意見もありますが、光定の著した「伝述一心戒文」に戒牒を賜った経緯が詳しく記されていて、現存する嵯峨天皇唯一の宸翰というのが現在の定説となっています。

光定戒牒は嵯峨天皇三八歳、西暦八二三年の書です。ところどころに大きく太書さした草書の文字を配して絵画的な裝飾効果をもたらし、また多様な書きぶりが混然としながらも違和感はありません。根底に王羲之の書法があり、それに欧陽詢の峻烈さと空海の気宇の大きさが加わっていると評されます。作意的な筆致でありながら、天皇としての高雅な風格を示しています。

参考文献 書道全集(平凡社)・墨79号(芸術新聞社)

桃花 雨を含みて開く



《大意》桃の花が雨をおびて開く (梁 簡文帝)

老鶴雲間の意 長松雪外の姿



《大意》老いた鶴は雲間に飛翔しようとし、長い松は雪の中からそそり立つ姿をしている (楊誠斎)



読み 春水に真堅無し (春先の水に本当の堅さは無い。時の推移は本来の姿を変えてしまうこと。「蘇東坡詩句」)

春水無
真堅

佐藤象雲書

左右均齊な結体。
第九画と十画でしっかりと踏ん張る。

第二画は長過ぎぬように
仰 平 俯

字勢が左右に拡がる字。
中央の○の位置が字の核となる

上部を大きく。
「土」は強い線で上部を支える。

筆順は文科省筆順の手引きと異なる。
下部の烈火は
上部縦画に照応させる。
仰 平 俯



- 一般部規定課題出品について
- ・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。
 - ・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。
 - ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

春氷無
真堅

春氷無
真堅

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

次号課題

隸書

戸妍
晴光入

春氷無
真堅

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

晴光 戸に入って妍なり

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

細字部昇格試験課題実施要項

- ・左記の三体千字文の一節を所定用紙に揮毫
- ・欄外に支部・段級・氏名を明記して下さい
- ・〆切三月三日(金)・受験料三、二四〇円

音

コウトウケツリヨク
チュウソクジンメイ

略解

孝とは力の及ぶ限り父母の心を安んずることである
忠とは命を捧げて誠実に奉仕することである



佐藤象雲書

支部	順位	氏名

竹節分や

春迎え春に鬼を出す

山頭火の句

和泉溪石先生書

現常之世

現常の世は……

象雲臨

■ 褚遂良・雁塔聖教序

(初唐・西暦六五三年)の臨書 (34)



『現常之世』

雁塔聖教序の一番の書的特徴は、用筆の変化にあります。初唐の歐陽詢・虞世南などの一連の楷書群は格調の高さと、もう一つ法度的規範的な整齊さが特徴です。そのなかにあつて褚遂良は用筆に奔放さと妙味が加わります。四十六歳で書いた伊闕仏龕碑、四十七歳の孟法師碑は虞世南の影響を感じさせますが、五十四歳の房玄齡碑では軽妙な細線を見ることが出来ます。そしてこの褚遂良晩年五十八歳の作品雁塔聖教序で、褚遂良の理想とする楷書に到達した感があります。

「現」寸分の狂いもない安定感に富んだ結体。

「常」前回と同字ながら、各線の筆致に違いがある点を見逃さないこと。

「之」筆断つて意連ねる。左下に流れる斜線は繋げてよい。

「世」各線の表情の変化を研究したい。



時人^{じしん}那^{んな}ぞ知^ちることを得^えん

象雲臨

■孫過庭・書譜（初唐・西暦六八七年）の臨書（16）

『時人那得知』

今月の文言は、王羲之と交遊が深かった謝安と王羲之の子王献之とのやり取りの部分です。謝安はある時、既に父王羲之とともに能書家として評価されていた王献之に「王羲之とキミの書は比べてどうかね。」と尋ねたところ、「もちろん私の方が上手です。」と云います。謝安は「世間ではそう言っていないがね。」と返したところ、王献之は「時人（今の人）にはわかるわけがない」と答えます。孫過庭はこの書譜で「自ら父に勝ると称するは、亦た過たずや」と評しています。これは書の芸術性とは関わりがなく、儒教道徳に基づいた非難です。書譜は伝統的な儒教思想に基づいた書論で、王羲之崇拝者だった太宗の影響も多分に感じさせ、王羲之尊崇の理念が基調となっています。また駢儷体という対句を多用した華麗な文章で、名句も多いこと知られています。